

アメリカの原爆観への宗教的な影響  
—SF 映画における核戦争の描かれ方の日米比較—

法学部政治学科 3 年 佐原 貴子

・序

・「Apocalypse」としての原爆投下

(1) アポカリプスのレトリックとは

(2) アポカリプスのレトリックの政治的・社会的インパクト

・冷戦期のアメリカ SF 映画の特徴

・事例研究：洋画 *Dr. Strangelove* (1963)

・比較研究：邦画『世界大戦争』(1961)

・まとめ

・参考文献

・序

---

核兵器は邪悪で撲滅させるべき危険な兵器であり広島原爆投下は人類の大きな過ちであった、そう日本人の子供たちは学校で教わる。日本は世界で唯一原爆の被害を受けた国であり、この負の遺産を抱える日本は国際社会が同じ「過ち」を繰り返させないように核廃絶を進める使命がある、という台詞は毎年 8 月の平和祈念式典は欠かせない。しかし、世界中が核兵器について同じように考えているとは限らない。高校でアメリカの現地校に一年間留学した際に受けた歴史の授業で、先生が原爆投下の是非を生徒に議論させたことがあった。賛否によって席替えをすると、半数の生徒が「正当な判断だった」と答えた。日本での常識が覆された瞬間であった。生徒たちの意見は概ねアメリカ全体の世論を反映している。米キニピアック大学 (Quinnipiac University) は 2009 年の世論調査で 6 割のアメリカ人は広島原爆投下の判断は「正しかった」と答えたと発表した。<sup>1</sup> 原爆投下に対する意識は日米で大きく異なっているのが現状である。

それはなぜか。カリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) に留学中に、Atomic Age という American Studies の授業を受講した。授業では、原爆投下がアメリカの政治だけでなく、大衆文化にどのような影響を及ぼしたかを学んだ。特に、原爆投下に対する認識の裏には、キリスト教の影響があることを教わり、政治的決定を文化的・宗教的な観点から分析できることを大変新鮮に感じた。原爆投下の正当性を勝者の理

---

<sup>1</sup> APFBB ニュース 2009 年 08 月 05 日「米国人の 6 割『原爆投下は正しかった』、米世論調査」  
<http://www.afpbb.com/articles/-/2627862?pid=4427553>

論、あるいは敗者の理論で論じることには限界がある。敗戦者からすれば、原爆はいつまでも命を奪う悪の産物であるし、勝者からすれば、それは戦争を終わらせた救世主のままであり、それぞれは主観的な分析からなかなか抜け出すことができない。この論文は、客観的にアメリカと日本の「原爆観」を考察することを試みる。原爆観の違いは政治的な背景の他にはどこから起因するのかという疑問について調査し、SF映画を媒体に具体的にどのように原爆の描かれ方が異なるのかを検証したい。

## 「Apocalypse」としての原爆投下

---

### (1) アポカリプスのレトリックとは

アメリカの授業で衝撃的な写真を見た。軍人のパーティーで、きのこ雲をモチーフにしたケーキに入刀をしている写真だ。<sup>2</sup> アメリカ人は非道徳的なのかと疑った。しかし、アメリカ人の原爆投下に対する認識を理解する上で、宗教的な背景を無視することはできない。原爆はしばしば終末論と関連され、神聖化されているのだ。その宗教的論理は、投下は神の決断であって起こる時には起こるものであり、従って原爆自体は恐ろしいものであってもそれが落とされることを恐れる必要はないのだ、そしてアメリカはその聖なる原爆を手に入れ一層崇高な国になったのだ、と人々を説得する。1950年に発売された Lowell Blanchard and The Valley Trio というバンドによる “Jesus Hits Like The Atom Bomb” という歌では、上記の内容が歌詞の中で歌われるとともに、原爆がノアの箱舟に例えられた。<sup>3</sup> ノアの箱舟とは、聖書の一節に登場する船で、神に選ばれし者を乗せて世界的な洪水から救ったものである。



終末論の内容を詳しく見ると、なぜ原爆投下に宗教的な説明が使われるかより明確になるだろう。終末論は英語では “Eschatology” と言い、終末の日が近づき、神が直接地上を支配する千年王国（至福千年期）が間近になったと説く。<sup>4</sup> この千年王国は、「聖書ヨハネの黙示録」20章4節から7節を根拠にしている。新約聖書の最後に書かれた「ヨハネの黙示録」では、著者のヨハネが神に見せてもらった未来の光景を描いたとされている。戦乱や飢饉、大地震など、ありとあらゆる禍が書かれ、天使と悪魔の戦いや最後の審判の様子も

---

<sup>2</sup> Bill Geerhart, *The Atomic Cake Controversy of 1946*.

<http://conelrad.blogspot.jp/2010/09/atomic-cake-controversy-of-1946.html>

<sup>3</sup> CONELRAD.COM, “Jesus Hits Like An Atom Bomb: Lowell Blanchard and the Valley Trio.” [http://www.atomicplatters.com/more.php?id=55\\_0\\_1\\_0\\_M](http://www.atomicplatters.com/more.php?id=55_0_1_0_M)

<sup>4</sup> Online Oxford Dictionary, “Eschatology.”

<http://oald8.oxfordlearnersdictionaries.com/dictionary/eschatology>

記されている。そして最後には、救世主イエスの再臨はまもなくだと伝えられて黙示録は終わっている。<sup>5</sup> 原爆投下による悲劇がこの終末の日と結びつけられているのだ。アメリカでは宗教が国家形成に古くから影響を与えてきており、宗教的なレトリックが政治社会や文化に登場することは決して珍しくない。そもそもアメリカ大陸開拓の第一人者はヨーロッパで迫害を受けていたプロテスタントの一派であるピューリタンと呼ばれる宗派の人達であり、彼らは神によってすでに選ばれており、自分達は神によって救われるという予定説を信じていた。例えばピューリタン達は、旧約聖書の世界で預言者モーゼに率いられて約束の地カナンに脱出したイスラエルの民に自分達をなぞらえ、自らをヨーロッパでの宗教的迫害から逃れて約束された土地である新大陸に脱出してきた者だと考えた。このような思想は時にインディアンとの戦いを神の試練に例え、インディアンの抹殺さえも正当化してきた。このように現実を宗教的な「物語」として解釈しようとする傾向は現代にも引き継がれている。北朝鮮やイラクを「悪の枢軸」と名指ししたブッシュ政権の言動は、ある国を善や悪にみなし、「現実を自分たちにとって都合のいい物語の中に押し込んで解釈しようとする営みを体現している」。<sup>6</sup>

話は戻るが、上記のように大きな自然災害等によって世界が破滅するレトリックを、アポカリプス (Apocalypse) と呼ぶ。直訳すると、黙示・啓示という意味だが、神による大革命のことを指している。注意すべきなのは、大惨事によって世界は滅びるが、同時に悪も一掃され、生き残った善者たちが新しい世界を形成するという意味を含んでいることである。<sup>7</sup> アメリカ人がアポカリプスのレトリックを好むのは、あくまでも自分達は善者であり、悪を払拭するアポカリプスを生き延びることができると思う傾向があるからだ。この幻想は、アメリカは神に選ばれた特別な土地であると説く、アメリカの歴史的な例外主義が関係している。アメリカ例外主義という言葉を最初に使用したのは、19世紀前半のフランス出身の裁判官であったアレクシス・ド・トクヴィル (Alexis de Tocville) だが、アメリカを神の国として特別視するこの思想を最も代表するのは、開拓時代サチューセツ湾植民地総督になったジョン・ウィンスロップ (John Winthrop) の演説である。彼はアメリカを「丘の上の町」(the City on the Hill) と表し、「アメリカはヨーロッパのような下界の汚れた世界とは別の丘の上であり、世界の模範的国家を、清教徒主義に基づきながら、神の意志の下に建設していく」と説いた。<sup>8</sup>ここに代表されるアメリカ例外主義は南北戦争時代や冷戦時代等を通じて歴史的に繰り返され、冷戦期の様々な大衆文化、特に映画や音楽において、アポカリプティックな言説を生み出してきたが、これに関しては後ほど詳しく説明する。

<sup>5</sup> Ebible, *The Revelation to John*. <http://ebible.org/web/Rev.htm>

<sup>6</sup> 鈴木透、『実験国家アメリカの履歴書 社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』(慶應出版会、2010年) 19-27頁。

<sup>7</sup> Online Oxford Dictionary, "Apocalypse."

<http://oald8.oxfordlearnersdictionaries.com/dictionary/eschatology>

<sup>8</sup> 植村泰三、『アメリカ例外主義再考 冷戦崩壊後の超大国アメリカの視点から』(目白大学人文学研究第8号、2012年) 51頁。

## (2) アポカリプスのレトリックの政治的・社会的インパクト

こうして原爆はアポカリプスの一貫としてアメリカの人々に受け入れられたが、その影響力の範囲は政治的な場面にまでも及んだ。原爆の研究開発が大詰めを迎え、いよいよ実用する段階まで来た 1945 年 7 月、トルーマン大統領は以下のような日記を残している。

We have discovered the most terrible bomb in the history of the world. It may be the fire destruction prophesied in the Euphrates Valley Era, after Noah and his fabulous Ark.<sup>9</sup>

日記には、原爆投下は“prophesized”、つまり予言されていたと綴られている。大統領もまた原爆と宗教を関連付け、人々にアメリカの例外主義を唱えたのである。特にノアの箱舟も言及されているのは特筆すべき点である。また、アポカリプスのレトリックはアメリカ政府の政策にも垣間見ることができる。1958年に政府によって出版された *The Doomsday Scenario* という原爆が落とされた時のサバイバルマニュアルでは“survival period”と“reconstruction period”が設定され、それぞれのシナリオでアメリカが生き延びるための計画が驚くほど細かく書かれている。<sup>10</sup> 例えば、原爆が投下された際の緊急事態にはどの政府高官がどこに避難し国の統括を進めるのかという移動計画や物資の分配計画等が記されているが、あくまでも自分達は生存者として新しい世界を作るのだというファンタジーが前提にあり、例外主義を象徴しているとも言えるだろう。

政府の、核を否定するよりむしろ共生の道を探るような政策とドゥームズデーシナリオは広く国民にも受け入れられていく。冷戦が深まるにつれ、政府は教育という分野においても国民を見えない核戦争に巻き込んでいくのである。小学校には原爆を生き抜く方法についての教育ビデオが配られ、例えば *Duck and Cover* (1951) という教育ビデオでは、かがんで覆う(duck and cover)という二つのステップを踏めば原爆が落とされても大丈夫だと繰り返し子供に語りかける。<sup>11</sup> あたかも、正しい行動をとれば原爆を生き残れると暗示しているのが象徴的である。主婦に向けては、*The House in the Middle* (1954) という家屋管理を促すコマーシャルが製作される。映像の中では、ちゃんとペンキが塗られ、庭が刈られ、室内も本やごみが片づけられた家は爆風の熱に耐えられるが、そのような管理の行き届いていない家は一瞬にして燃えると映像の中で実際の核実験によって実証されており、責任あるアメリカの母親として家のメンテナンスを怠るなというメッセージが込められている<sup>12</sup>。ここでも特徴的なのは、爆風を逃れたとしてもその後を襲う放射能については全く触れていないことである。

<sup>9</sup> Harry S. Truman, *Diary*, (“Documents on the Decision to Use Atomic Bombs on the Cities of Hiroshima And Nagasaki, 1945”). <http://www.dannen.com/decision/hst-jl25.html>

<sup>10</sup> L. Douglas Keeney, *The Doomsday Scenario* (MBI Publishing Company, 2002).

<sup>11</sup> FEDFLIX Internet Archive, *Duck and Cover* (1951).

<https://archive.org/details/gov.ntis.ava11109vnb1>

<sup>12</sup> FEDFLIX Internet Archive, *The House in the Middle* (1954).

<https://archive.org/details/Houseint1954>

以上のようにアメリカでは、原爆は宗教的なレトリックに巻き込まれながら、日本人が思うよりずっと現実的なものとして日常生活にしみついていったのだ。

## ・冷戦期以降のアメリカ SF 映画の特徴

---

アポカリプスの概念が顕著に表れているのはアメリカの SF 映画である。記憶に新しい最近の映画である、*The Day After Tomorrow*(2004) や *I am Legend*(2007) に共通しているのは、どちらも自然災害やらゾンビやらが世界を滅ぼし、数名が生き延びるというものである。このようなアポカリプスストーリーを描いた SF 映画は、原爆投下以降、とくに冷戦が色濃くなった頃から頻繁に登場するようになった。いくつかの特徴を紹介する。

第一に、何より生命・文明・人間性を壊滅させる核兵器と世界の終わりの姿が様々な形で数多く描かれている。その想像力は豊かとも言え、単純な爆発による災禍を描くだけでなく、*The Day After*(1983) のように投下後の放射能の影響に焦点を当てたものや、さらに、*Them!*(1953) や *The Incredible Shrinking Man*(1957) のように放射能によって突然変異をした動物や人間が登場するものもある<sup>13</sup>。*Them!* では、放射線を浴びた蟻が巨大化し、人間を襲う。また *The Incredible Shrinking Man* では、放射線被害によってどんどん体が小さくなり、最後には見えないほどになってしまうというストーリーである。さらに、SF 作家レイ・ブラッドベリー (Ray Bradbury) が原作を手掛けた、*The Martian Chronicle*(1983) では核戦争を繰り返す地球から、人間が火星に逃げていくストーリーが描かれている。<sup>14</sup>

第二に、前提として加害者というより、潜在的な被害者としてのアメリカ人が描かれている。戦後数年はアメリカが世界で唯一の核保有国であり、核兵器保有数もアメリカが 1950 年代前半頃まではソ連に比べて圧倒的優位に立っていたのにもかかわらず、自分達も被爆の危険にさらされているのだという考えが映画文化ではよく表れている。広島への原爆投下の翌日に『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙 (*New York Herald Tribune*) が、“What the atomic bomb had done to Japan, it could do to us” と記したように、原爆が落とされた日からアメリカ自身も原爆の被害者となったのだと、アメリカ文化歴史学者のブルース・フランクリン (Bruce Franklin) は考察している。<sup>15</sup>

第三に、SF の世界と現実が混同していく。*The Day After Tomorrow* などに代表されるように、しばしば禍は日常の世界を舞台におこる。これらは映画ではないが、象徴的な SF 小説としては、1945 年に『ライフ』誌 (*Life*) が 9 ページにわたって “The 36-Hour War” というタイトルで想定される核戦争について書いたものがあったり、核競争の未来をとてモリアルに描いたモルデカイ・ロッシュワルド (Mordecai Roshwald) の小説 *Level 7*(1959) が

---

<sup>13</sup> H. Bruce Franklin, *War Stars: The Super Weapons and the American Imagination* (Oxford UP, 2008), p.182

<sup>14</sup> Ray Bradbury, *The Martian Chronicle* (Simon & Schuster, 1950).

<sup>15</sup> Franklin, p.155.

あったりする。アメリカ人にとって核戦争は単なる SF ではなく、ノン・フィクションに近いものなのである。<sup>16</sup>

第四に、数多くの SF 映画や SF 小説で核兵器が描かれていても、核兵器自体の是非を問うことにはつなげていない。1946年にイェール大学(Yale University)のバーナード・ブロディ(Bernard Brodie)教授が「抑止力」という概念を生み出して以来、アメリカの安全は核廃絶よりむしろ、核の抑止力にかかっているという考え方が普及した。<sup>17</sup> したがって、SF 映画の中にも、核を失くそうというメッセージが明示されているものはほとんどない。核の悲劇から核の扱い方を考えさせられる映画はいくつかあるが、安易に核ミサイル発射ボタンを押すことへの批判や、人為的なミスでボタンが押されてしまう危険の喚起をするにとどまっている。フランクリンは『サタデー・イブニング・ポスト』紙(*Saturday Evening Post*)の記事を引用し、核兵器は「自明であるように、文明を守る盾」であり、「より大きく性能の良い盾を作り続ける」ことによってのみアメリカの「善の力」はソ連の「悪の力」に勝利することができる」と語り、<sup>18</sup> アメリカ人にとって核と安全は切り離せないものになっていったと分析した。

第五に、SF 映画は核兵器の正当性について論じるどころかむしろ、暗示的に国民に、政府の軍事的決断に干渉するのをやめ、秘密を受け入れ、核兵器があることに感謝をするように訴えるようになる。もっとも顕著にこの考えが現れているのは、政府公安局による数多くのコマーシャルだが、SF 映画でも例えば 1964 年の *Fail Safe* では、核戦争に突入する政府の判断を描いていて、民衆の意見はあまり取り上げられていない。しかも、誤ってソ連に核ミサイルを発射してしまった措置として、大統領は自国の都市ニューヨークに核兵器を落とす判断を下すのである。<sup>19</sup> 違う視点で皮肉的に核兵器を嫌うのではなく、核兵器を愛しそれと共生していくアメリカを表現するのは、のちに詳しく説明する *Dr. Strangelove, Or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*(1963)である。

また第六に、核兵器を扱う SF 映画には核兵器社会の病をテーマにするものも少なくない。その病とは、日々の生活を病的なものにしてしまうものだ。放射能による長期間の苦しみや静かな死の訪れ、あるいは慢性的な不信感や脅威に悩まされることで、健康的な恐れ方を忘れてしまい、狂ってしまう人間が取り上げられる。たとえば、*The Last Man on Earth*(1964)では、ゾンビを恐れ、神経をとがらせる男の様子が描かれる。耐えることのない恐怖や不信感により、男は日常というものや、普通の感情というものを失ってしまうのだ。<sup>20</sup> *Dr. Strangelove* にも、正気を失ってしまった将校が登場する。

最後に、終末の日が訪れても全員が残らずいなくなるというシナリオはほとんど見られ

---

<sup>16</sup> Franklin, p.157, p.184.

<sup>17</sup> Franklin, p.158.

<sup>18</sup> Franklin, p.181.

<sup>19</sup> Movie Walker、「未知への飛行」。http://movie.walkerplus.com/mv8727/

<sup>20</sup> *The Last Man on Earth*, Dir. Ubaldo Ragona & Sidney Salkow, Perf. Vincent Price, Franca Bettoia, Emma Danieli & Giacomo Rossi-Stuart. 20th Century FOX (1964).

ない。 *I am Legend* のように、誰かはかならず生き残っているし、多くの場合それはもちろんアメリカ人なのである。 *On the Beach* (1954) のシナリオは典型的である。北半球が核戦争によってほぼ廃滅した世界で、生き残ったアメリカ人が潜水艦に乗って未だ安全なオーストラリアに到着するところから物語が始まる。<sup>21</sup> まさに、アメリカ例外主義が現れている映画だろう。

以上のように、冷戦期以降のアメリカ SF 映画は核兵器とアポカリプスを関連づけて描くものが数多くある。また、核兵器はタブーであるというよりは、むしろ現実の産物であり、その核兵器と共に生きるアメリカ人の日常が舞台となっている。そして、核兵器があってもアメリカ人はなんとか生き残るのだという楽観的な考えがにじみ出ている。

### ・事例研究：洋画 *Dr. Strangelove* (1963)

上記で挙げた冷戦期以降のアメリカの SF 映画の特徴をよくとらえている映画の一つに、Stanley Kubrick 監督の作品の *Dr. Strangelove, Or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb* (1963) がある。これはブラックコメディ調の SF 映画で、核兵器に悩まされているアメリカ人を皮肉に表現している。大まかなあらすじとしては、ソ連の共産主義勢力が水道水にフッ素を入れてアメリカ人の“pure fluid”（純潔な血）を汚そうとしていると考えるリップー将校が、我慢できずに独断で核兵器をソ連に落とす究極の“Plan R”を空軍に指令したことによって、放射能によって地球全部を殺す能力のある“Doomsday machine”（世界破壊の兵器）というソ連の自動装置が発動する危険にさらされたアメリカ政府の様子が描かれている。物語の終盤、“Doomsday machine”の危険が避けられないと察したアメリカ大統領がストレンジラブ博士にアドバイスを請うと彼は、



マインシャフトという地下の世界を作って、数十万人をそこに 100 年住まわせれば人類は生き残るだろう、という。またその数十万人の選び方を大統領が問うと、博士は男女比を 1:10 にし、女性は若さや健康度、生殖機能の健全さ、知能などを算出し、性的に魅力的な者から選ばれるべきだと答える。そうすれば、国民総生産は 20 年で元通りになると彼は計算した。物語は、緊迫した議論が続き、最後に車いすに乗った博士が「名案がある！」と提言すると同時に自分が立ってい

<sup>21</sup> IMDb, *On the Beach Plot Summary*, [http://www.imdb.com/title/tt0219224/plotsummary?ref\\_=tt\\_ov\\_ps](http://www.imdb.com/title/tt0219224/plotsummary?ref_=tt_ov_ps)



ることに驚き、「総統！歩けます！（博士はドイツ移民の設定なのでヒトラーを指していると考えられる）」と叫びんだところで、数々のきのこ雲が “We'll Meet Again” の幸福なメロディーに乗せて画面にかわるがわる映されて終わる。このように *Dr. Strangelove* は不思議でシニカルな映画である。以降この映画がどのように冷戦期の SF 映画を象徴しているか詳しく考察していく。

まず当たり前だが、核兵器で世界が撲滅するアポカリプス的なシナリオを使っている。特に、正義のアメリカと悪のソ連が明確に分かれているのはアポカリプスのレトリックを特徴づける点の一つである。例えば、核爆弾搭載の航空機のパイロットが Plan R 指示を受け取るシーン。プランを遂行すると決意するとヘルメットを脱ぎ、カウボーイハットを代わりにかぶり直す。それと同時に太鼓の行進曲が流れ、戦闘モードに切り替わる乗組員の様子が映される。この時、パイロットはチームに対し短いスピーチを行う。

I want you to remember one thing, the folks back home is a countin' on ya, and by golly we ain't about to let 'em down... That goes for every last one of you, regardless of your race, color, or your creed.

アメリカ国民のために、正当で大切な任務遂行するのだと唱えていることがわかる。また、人種や宗教に言及し、違いを乗り越えて協力しようという台詞が典型的な善良なアメリカ市民を讃えているかのようである。また、最後の方でパイロットはカウボーイのように核爆弾にまたがり、掛け声をかけながら一緒に落ちていく。一方でソ連人はいかにもずる賢そうに描かれている。緊急会議に参加したソ連駐米大使は小太りで顔が怖く、盗撮カメラをこっそり持ち込んでいた。Doomsday Weapon が自動的に発動されるものであるということもアメリカに公表しておらず、アメリカ大統領を怒らせた。そして、会議中にアメリカの大統領がソ連の大統領に電話をかけると、ソ連の大統領は音楽のがんがん流れるパーティーに出席中で酔っぱらっているのだった。

また、この映画がアポカリプスのレトリックを象徴するもう一つの要因は、アメリカの例外主義が現れている点だ。例えば、リップー将校が自分のフッ素化された水道水がソ連の企みだという理論を説明するシーン。彼はフッ素が水道水の消毒に使われるようになったのは 1946 年で、ソ連がスパイ行動を開始した年と重なることから、ソ連はフッ素化によってアメリカ人の血を汚そうとしているのだという。このとき、彼はアメリカ人の血を表すのに “purity and essence of our natural fluids.” という表現を用いる。アメリカ人は神に選ばれたものであり、潔白で汚れがないのだという例外主義的な言説が伝わってくる。また、核戦争が不可避のものと確定したクライマックスのシーンではストレインジラブ博士がマインシャフトという地下の避難場所を提案し、100 年そこで住み続ける必要性を論じる。彼は核戦争が人類を本当に絶滅させるとは思っていない。無理難題のように思える提案だが、アメリカ人は救われるべくして救われるのだと言う例外主義の希望的観測が表現され



ている。

次に、核兵器社会の病がわかりやすく描かれている。核兵器社会の病とは絶えない不信任と不安のために狂乱的になることであるが、リップー将校はまさにそれに当てはまり、狂乱的な反共産主義者である。彼のフッ素化理論そのものも常識的ではないが、彼のいうその理論を確信するようになったきっかけも健全な脳の考えることではない。彼曰く、自分がフッ素によって汚染されたのに気付いたのは、性的な行為によってだという。行為の後に彼は疲労感と虚無感を感じたが、それはフッ素化された水道水によって“essence”を失くしたからだと彼は説明する。この独自の理論を根拠に、大統領の許可なく、核爆弾投下の命令を下してしまったのは、将校が核兵器社会の病に取りつかれてしまったからなのである。

また、この映画は副題の通り“*How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*”ということもテーマにしているように、核兵器を受け入れ色々心配するのをやめろと主張するプロパガンダを皮肉に取り上げている。“*Doomsday machine*”が発動されると決定しても一人動揺しない博士の様子や、最後のシーンできのこ雲が和やかな音楽と共演しているかのように演出されているのがとても象徴的である。また、映画には基本的に軍人と政治家しか登場せず、政府と民間が乖離されているのも注意しなければならない。マインシャフトに行ける人が政府によって機械的に選別されるように、民衆は政府の決断には何の影響も有していないので、すべてを受け取る以外術がないのである。

そして、この映画はリアリティーも意識している。Plan Rの指示を受ける前の爆撃機の乗組員はトランプで遊んでいたり、女性の裸体の写真を眺めていたりしており、日常風景が描かれている。また、リップー将校の横でずっと政府軍と戦闘をしていたマンドレーク事務局長は気が弱く恐がり、とても人間味がある。一方で閣僚の緊急会議は緊迫感が漂い、核戦争の危険は現実のもので日常と強く結びついていると暗示されている。

最後に、この映画は確かに核戦争の危険を皮肉っぽく描いたものではあるが、核廃絶論とは言えないことに注意をしないとイケない。核軍備競争が核戦争によって終わりをつげると、今度はマインシャフト競争だと閣僚がもらす。そこには核兵器をもったことへの反省というものはあまり見ることでできないし、映画の監督も核廃絶までをメッセージにすることを想定しておらず、どちらかというところアクシデントによって核戦争が勃発することの懸念を表している。このように、*Dr. Strangelove*は冷戦期のSF映画の特徴を体現している点が多い。

アメリカの核兵器の描かれ方はこれまで書いてきた通りだが、対して日本はどのようなものか。そもそも核兵器が登場するSF映画というものが思いつかない。核兵器が関連するものと言えば『ゴジラ』（1964年）などがあるが、登場する怪獣ゴジラは原子力発電所の事故が生み出したもので、核兵器は直接関係していない。核兵器が描かれる場合、たいていその映画は戦争映画で、原爆の悲劇を振り返る趣旨のものである。『黒い雨』（1989年）は海外でも知られているが、原爆の恐ろしさを唱え、反戦のメッセージが込められたものだ。その他、『父と暮らせば』（2004年）や『原爆の子』（1952年）等、原爆を扱った反戦映画は数多くある。



核兵器を扱ったSF映画となると、希少だ。しかし、比較研究の材料となる事例として、1961年に制作された松林宗恵監督の『世界大戦争』というSF映画を取り上げる。映画の大まかなあらすじは以下の通りだ。戦争が終わって16年が経ち、日本は高度経済成長期の真ただ中、東京は見事に復興を果たし世界で最も大きい都市の1つとなった。家族想いな主人公・田村茂吉は家計を支えようと、外国人記者の集まるプレスセンターの運転手として仕事に励む毎日を送っていた。また、田村家の長女・冴子は、下宿している船乗りの高野と恋仲になっており、高野は長い航海の旅から帰国し再会した日に結婚を両親に申し込む。一方、世界は連邦国と同盟国の二つの陣営に分かれ、両陣営はお互いに核兵器を持って対立を深めていっていた。度重なる衝突によって緊張はどんどん高まり、連邦国・同盟国陣営双方でボタンが押されれば弾道ミサイルが発射される状況となっていた。冴子が高野を再び航海の旅に見送ったある日、北極海上で発生した軍用機同士の戦闘をきっかけに事態は再び悪化、日本の総理大臣は体を無理してでも両陣営に調和を説得するが、全てが水の泡となり、東京にも警報が発動されてしまう。人々はパニックに陥り、田村家は最後の晩餐を開く。登場人物達は悔やんでも悔やみきれない気持ちを漏らしたが、ついに核ミサイルが墜落、東京は火の海となり全滅する。

この映画の特徴の1つ目は、国際関係の緊迫と核戦争の危険が太平洋戦争の記憶を呼び起こすものとして位置付けられていることだ。例えば、田村家の近所をまわる焼き芋屋さんの老人は、広島で家族を失っており、焼き芋で儲けたお金の一部分は広島の被爆者への寄付金にしている。また、主人公は緊迫する国際情勢についてのニュースを聞きながら、「戦争終わって一生懸命働いて、やっとここまで来たんじゃないか」と言う。アメリカのSFで

は必ずしも核戦争と太平洋戦争とは結び付けられない。このような特徴は日本独特のものであると言える。

次に、反戦と核反対のメッセージがあちらこちらに散りばめられている。もし戦争が起こったらどうしようと冴子が青年高野に尋ねると、高野は冴子にこう答える。「歴史で最初に火薬を使って戦ったのはだれだ？元寇だ。日本は世界で最初の火薬の被害者だったのだ。また日本は原子爆弾の最初の被害者であり、さらにビキニ島で最初の水爆被害者になった。そんな日本人だからこそ私達は平和を世界に求めているといけない」。あるシーンでは、冴子が焼き芋屋さんの屋台に置かれていた聖書を読み上げながら、世界各国の平和な様子が映しだされる。また、核爆弾投下の警報が発動されると、日本の総理大臣は「我が国は、両陣営に決して核兵器は使わないようにと必死に訴えかけている。政府の努力を理解していただきたい」と国民に呼びかける。一方で最後の晩餐で茂吉は耐え切れずベランダで「母ちゃんには別荘を建ててやるんだ！冴子には凄い婚礼をさせてやるんだ！春江はスチュワードレスになるんだ！一郎には大学に行かせてやるんだ！俺の行けなかった大学に……!!」と夕日に向かって叫ぶ。核兵器が落とされることに対する、政府と国民両方の怒りがうかがえる。そして、核爆弾が落とされて東京がマグマに覆われ、映画のクロージングに入ると、次の様なテロップが現れる。「この物語はすべて架空のものであるが、明日起こる現実かも知れない。しかしそれを押しとめよう！われらすべてが手をつないで」。戦争・核兵器反対のメッセージはこれだけではなく、しつこいほどに強調されている。わざとらしく、無理やり押し込めたようなセリフもあり、*Dr. Strangelove*に比べるとリアルさに欠けている。

最後に、日本人はあくまでも被害者として描かれている。日本は、対立する両陣営のどちらにも属していない設定であるのにも関わらず、ミサイルの攻撃目的地に定められてしまう。その経緯の詳しい説明は映画ではされていない。核兵器が落とされるかもしれないと人々が心配し始めたころ、茂吉は核兵器なんて落とされるわけがない、人々を一瞬にして蒸発させてしまうなんてそんなのひどいじゃないか、と嘆くが、このような言説にも被害者である日本人に同情を求めるようなメッセージが暗示されている。戦争を思い出すシーンでも加害国としての日本は言及されていないように、この映画では原爆の被害国としての日本が強調されて描かれている。

以上のように、アメリカの核兵器の登場するSF映画と比べると日本のそれは太平洋戦争への反省と反戦メッセージをテーマにしている。そもそも核兵器を扱ったフィクションというものは希少であり、核兵器が未来に使われるという想定にはまだまだタブーが存在しているように見える。戦前と戦後の日本は明確に区別され、戦後は核クリーンな「被爆国として平和を推進する日本」を全面に強調する傾向にあるため、「核兵器社会の病」を生み出しているアメリカほど、リアルで身近に緊迫した核の存在がないのである。

---

## ・まとめ

---

アメリカ人にとって、原爆はただの軍事兵器ではない。それは神からの贈り物であり、神に選ばれしアメリカ人の科学技術の産物である。核兵器はアポカリプスを発生させる恐ろしいものであるが、同時にアメリカ人を守る兵器なのである。核兵器を一度生み出してしまったアメリカ人はそれを手放せなくなる。それは、単純に戦争の勝利者の論理だけでは説明できない。キリスト教の終末論と例外主義のレトリックを用いられて説明されるようになった核兵器は人々の生活に密接に結びついていき、タブー的というよりかむしろリアルな存在となり、核兵器社会の病が人々の心に蔓延していく。他方である人々はそれに目をそらさずに受け入れ共生していく道を探していく。それは時に政府への無言の服従や、核兵器を愛することさえも伴っていくのである。そしてそのような核兵器への身近な感覚は、数えきれないほどのSF映画を生みだしていく。

他方で日本はどうだろうか。核兵器と太平洋戦争は切っても切り離せない関係のままであり、核兵器の使用は現在の目の前の問題というよりかは、過去を反省するツールとして扱われている。核兵器が登場する映画は、戦争を二度と起こさないようにというメッセージを伝える反戦映画である場合がほとんどである。アメリカでは核兵器の是非を問うことを目的とせずに核兵器や放射能の影響を受けた世界を描く映画があるが、日本ではそういうことがめったにない。核兵器を安易にフィクションに使うことは不謹慎であるかのような無言の圧力が漂う。そういう意味では、日本の原爆観は、敗戦国の理論を抜け出せていない。非核三原則を掲げながら、アメリカの核の傘の守られている日本であったり、太平洋戦争では生物兵器を開発した加害者でもある日本であったりはテーマに取り上げられないのである。

---

## ・参考文献

---

### [単行本]

Franklin, H. Bruce. *War Stars: The Super Weapons and the American Imagination*. Oxford University Press (2008).

Keeney, L. Douglas. *The Doomsday Scenario*. MBI Publishing Company (2002).

Bradbury, Ray. *The Martian Chronicle*. Simon & Schuster (1950).

鈴木透、『実験国家アメリカの履歴書—社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡—』（慶應出版会、2010年）。

### [論文]

植村泰三、「アメリカ例外主義再考—冷戦崩壊後の超大国アメリカの視点から—」、『目白大学人文学研究』第8号、2012年。

[WEB]

APFBB ニュース 2009 年 08 月 05 日 「米国人の 6 割 『原爆投下は正しかった』、米世論調査」 <http://www.afpbb.com/articles/-/2627862?pid=4427553>

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

CONELRAD.COM. “Jesus Hits Like An Atom Bomb: Lowell Blanchard and the Valley Trio,” [http://www.atomicplatters.com/more.php?id=55\\_0\\_1\\_0\\_M](http://www.atomicplatters.com/more.php?id=55_0_1_0_M)

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

Ebible. “The Revelation to John.” <http://ebible.org/web/Rev.htm>

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

FEDFLIX Internet Archive, “Duck and Cover” (1951),

<https://archive.org/details/gov.ntis.ava11109vnb1>(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

FEDFLIX Internet Archive, “The House in the Middle” (1954)

<https://archive.org/details/Houseint1954> (最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

Geerhart, Bill. “The Atomic Cake Controversy of 1946,”

<http://conelrad.blogspot.jp/2010/09/atomic-cake-controversy-of-1946.html>

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

IMDb, On the Beach Plot Summery,

[http://www.imdb.com/title/tt0219224/plotsummary?ref\\_=tt\\_ov\\_ps](http://www.imdb.com/title/tt0219224/plotsummary?ref_=tt_ov_ps)

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

Movie Walker, 「未知への飛行」 <http://movie.walkerplus.com/mv8727/>

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

Online Oxford Dictionary, <http://oald8.oxfordlearnersdictionaries.com/dictionary>

(最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

Truman, Harry S. Diary, “Documents on the Decision to Use Atomic Bombs on the Cities of Hiroshima And Nagasaki (1945).”

<http://www.dannen.com/decision/hst-jl25.html> (最終閲覧日：2014 年 2 月 2 日)

[映像]

*The Last Man on Earth*, Dir. Ubaldo Ragona & Sidney Salkow, Perf. Vincent Price, Franca Bettoia, Emma Danieli & Giacomo Rossi-Stuart. 20th Century FOX, (1964).

*Dr. Strangelove, Or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*, Dir. Stanley Kubrick, Perf. Peter Sellers, George C. Scott, Sterling Hayden, Keenan Wynn & Slim Pickens, Columbia Pictures (1964).

『世界大戦争』、監督・松林宗恵、出演・フランキー堺、宝田明、乙羽信子、星由里子、山村聰、東宝 (1961 年)